



疎開先から戻った人々が暮らす「ツイン」村。おはさんが全ツプについて一人散歩していた

原発事故20年 「モロゾク」に 暮らす

■ 広島約20倍以上

間近に見る石棺は、巨大な放射線発生装置を封印している。放射線測定器は、一時間当たり六六六シーベルト。広島約20倍以上にあたる。放射線は、石棺から漏れ出している。

「おはさん」は、巨大な放射線発生装置を封印している。放射線測定器は、一時間当たり六六六シーベルト。広島約20倍以上にあたる。放射線は、石棺から漏れ出している。

不思議な街チェルノブイリ 労働者3000人住み活気



原発から約13km離れたチェルノブイリ市。商店や病院、キエフの自宅に戻るのホテルから教会までが揃っている。立ち入り禁止ゾーンの内側には、森林火災・汚染防止のために、非常事態宣言の村に戻った住民が、さまざまな行政サービスが提供されている。警察や消防、郵便の機能のほか、食料の移動も確保されている。チェルノブイリ市には、約3000人の労働者が住み、活気がある。事故前からの存在するホテルで、「出張」の行政マンが利用している。報道関係者などが控る別のホテルは、簡易の「隔離」で客室は十三。一泊だが、シャワーは熱い湯が出る。なかなか快調だった。放射線測定器も、広島を下回る数値を示す。チェルノブイリ市のあちこちを計測してみたが、どこも低かった。

立ち入り禁止ゾーン内にあるチェルノブイリ市。仕事帰りの労働者が立ち寄り

「こうして広島はゾーンがないんだ」と不思議がった。ただ、放射線に対する感受性が高い十八歳以下は、たとえ曇りでも理由があつてもゾーン内への入場許可は下りない。帰村者の年齢も、四十九歳から九十歳までで高齢が目立つ。

間近に石棺要塞。鳴り響く放射線測定器、気味が悪い



ウクライナの首都キエフから北へ約100km。濃霧の中、夜汽車を乗り換えて、チェルノブイリ原発に向かった。苦勞して近づいた「石棺」は、巨大な放射線発生装置を封印している。放射線測定器は、一時間当たり六六六シーベルト。広島約20倍以上にあたる。放射線は、石棺から漏れ出している。

5万人の営み、子の歓声 都市ごと捨てられ

■ 監視警戒し撮影

国の機関を通して申し込んだ一泊二日のソーン巡回ツアー。費用は通訳士の二人分が大半で約八万四千円。ソーン内のチェルノブイリ市で働いている平均年齢が約三十三歳の労働者の平均月給が約三万五千円を考えると、相当な額だ。

見せる、突然車が止まった。助手席のガイドが振り返り、車から降りて写真を撮るよう促す。4号機まではかなり遠い。核施設を狙うテロ対策として数ヶ月前から、これ以上近づいて撮影できないようになった。「もっと近づいてほしい」。ガイドに食い下がると、原発を取り囲んでいる高い壁のそばまで車を寄せた。もう一つ、石棺からの距離は約五百メートル。監視は厳格だ。ソーン内には、今なおヘルベリで汚染された場所が少なくない。事故の処理作業に使われて汚染したヘリコプターや消防車の残骸置き場があった。ここでも測定器は、限定的に放出されているのか、短時間なら

問題は無いと思いが、さすがに気味が悪い。野球場がいつも入りそうな広大な敷地に消防車や約二十台が捨てられている。除染後に鉄くずが

「あちこちで悲鳴に似た警告音が測定器から鳴り響いた。広島の十倍、五十倍、百十倍、場所によっては測定値は違ったが、高い数字を示す。

「動物で汚染調査」
二百間、三十分、閉鎖区画で走り回った。途中、ソーン内を走らせていた、小型の馬の群れや大きな角をたくわえたシカも出会った。政府事故後、放射線汚染の影響を調査するため、野生動物を放した。いまは数百種が繁殖し、クマやオオカミもいる。



チェルノブイリ市の遊園地跡に残る観覧車。稼働前に事故が起こり、子どもたちを喜ばすことは一度もなかった



「どこにでもあんな海外旅行にはありません。史上最悪の原発事故の舞台を訪れるチャンスです。首都キエフから車で二時間、親切的運転手が迎えに上がります。キエフ中心部のホテルに置かれる外、外国人観光客向けのソーン内には、S.F.映画を思わせるような宣伝文句が躍っている。原発周辺の立ち入り禁止ゾーンを訪ねる日帰りツアー、旅行会社に問い合わせると、二人以上の参加で一人百七十五〜二百千円(約一万二千〜一万六千円)という。ウクライナ非常事態の関連機関のガイドは「二年は二十万人以上がソーンに入るだろう」と説明している。見学希望者が殺到し、事故二十年の四月二十日までは一般観光客の入場を制限しているのだという。いまは報道関係者の立ち入りに限っているらしい。

ひび割れ漏れる放射線



「密封4号機」老朽化激しく

事故後、突貫工事で建設された4号機を覆う石棺。その老朽化は激しく、支柱が腐り、崩壊の危険も迫る。さき間やひび割れから染み込んだ雨水による地下水の汚染も深刻だ。

新シェルター計画は暗礁

工費は約100億円。補強費を含めると、計二百億円に上ると見られている。シェルターは、高さ約10m、幅約100mのアーチ形。石棺から放射線が漏れ出しているため、離れた場所から建設し、完成後にレーンに乗せて移動させる。石棺とすき間を覆う計画だ。

「どこにでもあんな海外旅行にはありません。史上最悪の原発事故の舞台を訪れるチャンスです。首都キエフから車で二時間、親切的運転手が迎えに上がります。キエフ中心部のホテルに置かれる外、外国人観光客向けのソーン内には、S.F.映画を思わせるような宣伝文句が躍っている。原発周辺の立ち入り禁止ゾーンを訪ねる日帰りツアー、旅行会社に問い合わせると、二人以上の参加で一人百七十五〜二百千円(約一万二千〜一万六千円)という。ウクライナ非常事態の関連機関のガイドは「二年は二十万人以上がソーンに入るだろう」と説明している。見学希望者が殺到し、事故二十年の四月二十日までは一般観光客の入場を制限しているのだという。いまは報道関係者の立ち入りに限っているらしい。

ツアー盛況 落書きも目立つ

建物の壁に落書きが目立つ。やむを得ず、街を後にした住民たちには、どう映るのだろうか。この半年以内に書かれたらしいが、神経をたてるのではない。キエフ市内にあるソーン見学を請け負う会社によると、アメリカの映画会社から、無の街を舞台に映画撮影したいとの打診もあった。政府が許可しなかったという。疎開した住民でつくる市民団体「カムリヤキ」は昨年十月から、街の永久保存を政府に求める署名活動を展開している。タマラ・クラシスカ代表(50)は「無人になった街は悲劇の徴。多くの人々が生活した証し」とも、観光パンフには、ソーンを見学して放射線を浴びて危険は低い」とも説明がある。末尾には「ウクライナ博物館を見学すれば、まったく安全です」。もちろん、見学後の健康の保証は、どこにもない。